令和３年度

八女市平和祈念式典

日時：令和３年８月６日（金）午前８時１０分開式

会場：星のふるさと公園平和の広場

八女市役所 URL:http://www.city.yame.fukuoka.jp/

平和祈念式典 次第

１．開　式

２．黙とう「サイレン吹鳴」
　　原爆死没者の慰霊と恒久平和を祈念

３．式　辞「八女市長　三田村統之」

４．広島市長メッセージ

５．あいさつ
「福岡県原爆被害者団体協議会会長　中村 国利 氏」

６．平和の誓い
「小学生代表　八女市立星野小学校　代表」

「中学生代表　八女市立星野中学校　代表」

７．全国弁論大会優勝論文披露（仮称）
「九州文化学園高等学校 井本 志帆 氏」（調整中）

８．千羽鶴献呈

９．献　花

10．「この灯を永遠に」合唱（星野中学校全校生徒）

11．閉式のことば

平和の塔の由来

１９４５年（昭和２０年）８月６日午前８時１５分、広島に人類史上初めて原子爆弾が投下されました。広島を焦土と化したその火が、広島から遠く離れたこの地に、今もなお燃え続けています。

八女市星野村（旧星野村）で生まれ育った山本達雄氏は、１９４４年（昭和１９年）１２月に３度目の召集を受け、豊田郡大乗村の暁２９４０部隊で任務に就いていました。

１９４５年８月６日、山本氏は、いつもの通り、広島の宇品にあった暁部隊司令部に向かうため、汽車に乗っていました。そして、もうすぐ広島駅という所で、突然車中をイナズマ（稲妻）が走ったかと思った瞬間、乗客は床に叩きつけられ、大地を揺るがす爆発音とともに汽車が止まりました。無事を確認した山本氏は、軍人としての使命感から、汽車を降り司令部に向かって走り出しました。また同時に山本氏の脳裏には、市内で金正堂書店を営む叔父・山本彌助の安否が気掛かりでした。しかし、市内に近づくにつれて目の当たりにするのは、燃えさかる炎の中、男女の区別もつかないほど焼けただれ、もがき苦しむ人々の群れと、断末魔のうめき声。その惨状は、この世のものとは思えない地獄絵だったといいます。

８月１５日終戦を迎え、山本氏は、これまで父親代わりに自分を育てかわいがってくれた叔父の行方を必死になって探しましたが、どうしても見つけることができませんでした。

復員命令が出た山本氏は、一面焼け野が原となった広島で、何の手がかりも見出せないまま、最後の別れに金正堂書店の焼け跡に行きました。そこで、書店の地下壕でくすぶり続けていた火を見つけ、せめて叔父の遺骨代わりにと、出征するときに祖母が持たせてくれたカイロに移しました。９月１６日のことでした。

こうして広島の原爆の火は、奇跡的に３５０ｋｍ離れた八女市星野村へと運ばれることとなりました。以来、この火は、遺骨すら見つけることができなかった叔父・彌助と、目の当たりにした多くの原爆犠牲者の供養と怨念の証として、山本家の仏壇に灯され、火を絶やさないために火鉢やカマドにも移し、人知れず２３年間灯し続けられました。

戦争のない平和な世界への願い、しかし、原子爆弾に対するどうしようもない憤り。

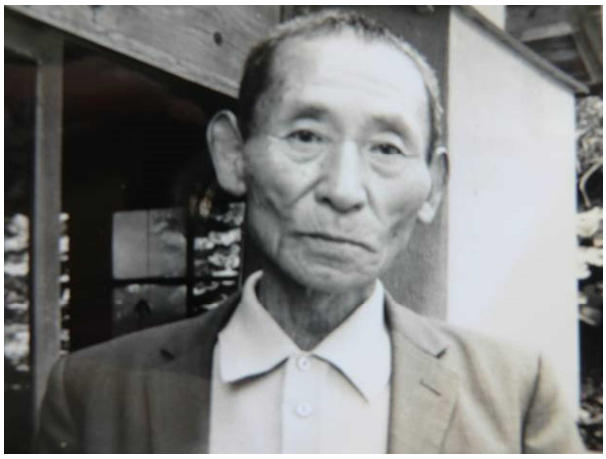
息絶える人々に託された憎しみと報復への約束。２３年の歳月は、山本氏にとって言葉では到底表現できないほどの苦しい心の葛藤の日々でもありました。

１９６８年（昭和４３年）、当時の星野村は、この火を全村民の平和への願いとして受け継ぎ、同年８月６日、旧星野村役場に建立された平和の塔に灯され、以来、毎年広島に原爆が投下された８月６日午前８時１５分、全村民をあげて平和祈念式典を開催してきました。

１９８８年（昭和６３年）５月、ニューヨークで開催された第３回国連軍縮特別総会に「平和の火」として届けられ、また全国各地に採火され、平和のシンボルとして灯されました。その後「平和の火」は、被爆５０周年を迎えた１９９５年に整備された平和の広場に、福岡県原爆死没者慰霊の碑と共に新たに建立された平和の塔に灯されました。

２０１０年（平成２２年）、合併と伴に八女市がこの火を引き継ぎ、毎年、原子爆弾が投下された８月６日に平和祈念式典を開催しています。

この火は、２００４年（平成１６年）５月１１日に永眠された故山本達雄氏の御霊と共に、争いのない平和な世界を願って、これからも永遠に灯し続けます。



広島に投下された原爆の火を持ち帰られた
故山本達雄氏

1995 年まで灯し続けた平和の塔

福岡県原爆被害者団体協議会原爆死没者慰霊の碑

１９９５年に整備された平和の塔は、福岡県原爆被害者団体協議会の「慰霊の碑」と伴に建立されました。

原爆死没者慰霊の碑【碑文】

１９４５年（昭和２０年）８月６日・９日、広島・長崎に原子爆弾が投下され、２つの都市は一瞬のうちに消滅しました。福岡県民でこの原子爆弾により現地で死没した人、帰郷後原爆症で死没した人、被爆後他県から福岡県に移住して死没した人、さらに身許不明の犠牲者として遺骨を現地に留める人、遺骨もないまま広島・長崎の地下に今もむなしく埋もれる人など未曾有の痛苦のうちに世を去った多数の福岡県の被爆者の霊に対し深い弔意を捧げます。福岡県内には、広島・長崎に次いで１万有余人の被爆者が住んでいます。そして、１９９５年（平成７年）被爆５０周年を迎え、福岡県原爆被害者の長年の願いであった原爆死没者慰霊碑が星野村のこの地に建設されました。私たちは村のこのご厚意に感謝するとともに、建設にあたりご援助いただいた国・県をはじめ、県民各位のご援助に厚くお礼申しあげます。御霊よ安らかに眠ってください。

１９９５年３月　福岡県原爆被害者団体協議会

非核・恒久平和都市宣言に関する決議

恒久平和は、人類共通の念願であり国際的な核軍備拡大競争は新たな核戦争の危険を増大させている。

我が国は、核被爆国として、また平和憲法の精神からも再び広島・長崎の惨禍を絶対に繰り返させてはならない。

われわれは、命の尊厳を深く認識し、非核三原則が完全に実施されることを願い核兵器廃絶を全世界に訴えるとともにこの人類普遍の大義に向かって不断の努力を続けることが肝要である。

よって八女市は平和への誓いを新たに決意し、ここに「非核・恒久平和都市」を宣言する。

以上決議する

昭和58年12月21日

八女市議会

//平和の火 HISTORY//

1945 年	８月　６日	人類史上初めて、原子爆弾が広島に投下される
1945 年	９月１６日	山本達雄氏は、叔父彌助が営んでいた金正堂書店跡地から、原爆の残り火をカイロに入れ持ち帰る。以来、２３年間自宅の仏壇やカマドで灯し続けられる。
1966 年	８月　６日	山本氏が秘かに灯し続けてきた原爆の火が、朝日新聞に掲載され、多くの人が火の存在を知ることとなる。
1968 年	８月　６日	火が山本氏から星野村へ受け継がれ、星野村役場に建立された平和の塔に灯される。以来、星野村では、毎年８月６日に平和祈念式典を挙行する。
1988 年	３月１４日	星野村定例村議会において、核兵器廃絶恒久平和の村宣言に関する決議を採択する。
1988 年	３月２４日	同年５月末に開催される第３回国連軍縮特別総会に向け、採火された火は、原水協を中心とする平和団体により全国をリレーし、開催地ニューヨークへ届けられる。
1990 年	９月２９日	星野村は、平和の塔の設置及び管理に関する条例、施行規則を制定し、平和の火の分火及び採火に関する基準を定める。
1991 年	８月２５日	原爆の火をテーマにしたカンタータ「この灯を永遠に」が東京在住の作曲家安藤由布樹氏により作曲され、その初公演が久留米市と星野村立星野中学校体育館で開催される。この公演は、「東京この灯を永遠に合唱団」と「星野平和の灯音楽祭実行委員会」の企画により実現することとなる。
1995 年	５月　８日	平和の広場に新たな平和の塔を建設し、平和の火を移設し灯される。新たな平和の塔は、彫刻家横沢栄一氏に設計を依頼、福岡県原爆被害者団体協議会の慰霊の塔と一体で建立される。
1999 年	４月２７日	長崎県の式見中学校から送られたクスノキの苗木植樹。
2001 年	８月　６日	平和祈念式典に広島市長からメッセージが送られ、式典で代読により紹介される。以来、毎年式典に広島市長からメッセージが届けられている。
2003 年	８月　６日	平和祈念式典で、星野中学校全校生徒により「この灯を永遠に」が合唱される。以来、星野中学校全校生徒により平和祈念式典で歌い継がれている。
2004 年	５月１１日	山本達雄氏永眠。享年 88 歳。
2005 年	８月　６日	被爆６０周年式典で、戦争・原爆詩の朗読会やカンタータ「この灯を永遠に」を作曲された安藤由布樹氏の講演会を開催する。
2010 年	２月　１日	星野村は、市町村合併により八女市となる。平和の火も星野村から八女市に引き継がれる。
2015 年	８月３０日	広島市長、八女市（星野村）へ訪問。広島市より寄贈された「被爆アオギリ二世」の植樹式が平和の広場にて開催される。

// 平和の塔に関して//

所 在 地　*福岡県八女市星野村 10821 番地１　星のふるさと公園「平和の広場」*

アクセス　*九州自動車道八女 I.C から２４ｋｍ*

JR 鹿児島本線羽犬塚駅⇒堀川バス「池の山前バス停」約 60 分

連 絡 先　*八女市役所星野支所まちづくり推進係 0943 (52) 3112／FAX (52) 3283*

別紙1

「令和3年度　平和祈念式典」 計画書(案)

開催期日	令和3年8月6日(金曜日)			備　　考
会　　場	星のふるさと公園　平和の広場			
開始時間	午前8時10分			
次　第	1. 開式のことば	司会	8:13	
	2. 黙祷(サイレン吹鳴)		8:15	屋外サイレン＋CD
	3. 式　辞	三田村市長	8:16	支所で「案」を作成、秘書係へ
	4. 広島市長メッセージ	本庁総務課	8:24	
		秋山課長代読		
	5. 来賓(予定)		8:30	
	福岡県原爆被害者団体協議会会長	中村国利 氏	予定	要確認・調整
	※電報披露	司会	8:35	
	6. 平和の誓い		8:37	
	小学生代表(星野小学校6年生)			学校長に依頼
	中学生代表(星野中学校3年生)			学校長に依頼
	7. 全国弁論大会優勝論文披露(仮称)		8:47	
	九州文化学園高等学校　3年生	井本志帆　氏		調整中
	8. 千羽鶴献呈		8:52	
	市内小学校ほか			本庁総務課・文化課で調整
	生きがいデーサービスほか			
	※従来は小学生に献呈を依頼していたが、本年度は中学生に献呈を依頼する			
	9. 献花　約80名	参列者全員	9:02	
	10.「この灯を永遠に」合唱	星野中生徒全員	9:12	学校長に依頼
	※マスクまたはフェイスシールドの着用などコロナ対策を講じて実施する(中学校と要打合せ)			
	11. 閉式のことば	司会	9:20	

令和３年６月３０日

平和学習『平和の火』ついて

九州文化学園高等学校　平和学習委員会

１．概要

毎年、長崎原爆が投下された日に因み、平和学習を実施しており、被爆者の講演、戦争語り部の講演、それらに関する DVD 鑑賞など実施している。これまでの学習活動を踏まえ、今回は新たな取り組みを実施したい。

昨年度、本校生徒（井本志帆：3 年 1 組）が、福澤諭吉記念全国高等学校弁論大会に出場するにあたり、原稿作成の段階で福岡県八女市において取材を行った。戦争や原爆についての内容を調査するためのであったが、その際、同市星野村にある『平和の塔』を訪問し、その塔の頂で燃える広島原爆の残り火を見学した。

この『平和の塔』は、昭和 20 年(1945 年)広島・長崎の原爆によって亡くなられた方々の冥福を祈り、世界平和への願いを新たにしていくために建てられている。そして塔の中に燃える『平和の火』は、焦土と化した広島から星野村出身の山本達雄さんが持ち帰えられたものである。ところがこの火は、その名の通り、“平和を願う火”ではなく、親戚の命を奪った恨みの火であることを知り、井本は衝撃を受けた。この体験を通して得たものを、ぜひ全校生徒にも伝えたいと井本自身が考えたことが今回の取り組みの端緒である。

戦争は、このような憎悪を生み出す機会である。憎悪は負の連鎖のエネルギーにもなり、平和の実現と正反対のものであることを知ることも有用である。この平和の火を実際に見ることで、生徒に例年とは違った方向で、平和を考える機会となればと考えている。

２．目的

例年の平和学習は、戦争や原爆の悲惨さを知ることで、再びその惨禍が繰り返されることがないようにという視点で行われている。つまり平和を愛する心を育てることが主眼である。今回はこれに加えて、採火された『平和の火』を観ることで、原爆の事実の片鱗がまだ残っていることを実感すると共に、人間が誰でも持ち得る憎悪の感情は戦争や争いにつながることを改めて知り、このような感情を持つことがない社会を築くことが大切であることを学ぶ。

３．事前準備活動

６月中　　：採火申請書の提出（八女市役所星野支所まちづくり推進係 担当：井上様）
　　※要事前協議
８月６日（金）：平和祈念式典に参列（井本・引率：長畑）
　　式典後、平和の火採火　→　佐世保へ移送・保管
８月７日（土）：平和学習

４．学習活動内容（当日）

DVD を鑑賞する部屋へ移動
↓
DVD 鑑賞①（ナガサキの少年少女たち）31 分
DVD 鑑賞②（星野村の火）10 分
↓
鑑賞後、各教室へ移動開始
↓
『平和の火』見学（玄関ホール）
↓
各教室で感想文作成
※各教室にて、担任より『平和の火』についての説明をおこなう。

５．その他

要準備事項：DVD 鑑賞の部屋の確保・DVD 借受・配布資料・原稿用紙

福沢諭吉記念高校弁論大会　佐世保の井本さんが最優秀賞　原爆の影響など訴え　／長崎

長崎

毎日新聞　2020/12/15　地方版　有料記事　385文字

福沢諭吉記念第５９回全国高校弁論大会（大分県中津市主催、慶応義塾共催）が中津文化会館であった。最優秀賞には「まだ続いている」の題で、戦争を知らない世代が行動する大切さを訴えた佐世保市の九州文化学園高２年、井本志帆さん（１７）が選ばれた。

中津ゆかりの福沢にちなみ、毎年開催している。福沢の遺徳を顕彰し、弁論…

福澤諭吉記念第59回全国高等学校弁論大会出場原稿

まだ続いている

九州文化学園高等学校　２年　井本志帆

「せっかくの夏休みなのに、何で学校に？」

８月９日は長崎に原爆が投下された日で、長崎県内は祈りに包まれます。そしてこの日、学校で平和教育が行われます。これが私は苦手なのです。毎年、この日は被爆者の方の講演を聴きます。もちろん聴けば戦争も核兵器もダメだとは思うのですが、現実には紛争も核兵器もなくならないし、平和の実現なんて私たちでどうにかできるの？これが私の本音でした。

そしてもう一つ、私にはこの戦争について以前から疑問がありました。それは、なぜ日本人は原爆を２発も落とされたにもかかわらず、アメリカを憎んでいないのかということです。私自身もアメリカは好きな国だし、私の周囲にもアメリカが憎い、という人は見当たりません。ところが中国や韓国では、今でも日本に対して良い感情を持たない人々がいます。この違いは何なのでしょうか。

今年は戦後７５年の節目の年で、例年よりも新聞やネット上で戦争の話題が多く取り上げられた気がします。そんな中、一つの事実を知りました。福岡県八女市役所の広報誌に、終戦直前、アメリカ軍のＢ２９が撃墜され、生き残った乗組員に村の住人が暴行を加えたという記事が載せられていました。当時の日本人がアメリカに対する憎悪を持っていたことがわかる事実です。また、八女民族資料館には墜落したＢ２９の機体の一部が展示されていること知り、この目で確かめに行きました。物言わぬ銀色の金属は何とも悲しげでした。私は市役所に、“戦時中にあった日本人の恨みはなぜ消えたのでしょうか”という質問状を送りました。すると、すぐにこの記事の執筆者の方にお会いできるよう、取り計らって下さいました。

８月の終わり、私は再び八女市に向かい、その方にお会いしました。その方は郷土史の研究家で、以前教師をされていた戦争体験者でした。ここでは先生とお呼びします。先生にＢ２９の墜落現場にも案内していただき、そこで当時の出来事を詳しく聴きました。捕まったアメリカ兵は電信柱に縛られ、住人の怒りに任せた暴行が何時間も続き、小さな子ども達までもがそれに加わったそうです。茶畑が広がるのどかな場所で、そのようなことが起きていたことに。私は言葉を失いました。

その後私たちは、同じく八女市星野村にある『平和の塔』を訪ねました。この塔の上には、広島原爆の残り火が今も点し続けられています。この火は、平和を願って点されていると私は思っていました。しかし実際は違いました。この火は、持ち帰った人にとって親戚の命を奪った“恨みの火”であり、“平和を願う火”ではなかったのです。この場所でも憎悪の感情が存在し、今なお、戦争の苦しみ悲しみは続いていることを感じました。

悲しみや恨みの感情が今も残る一方、私たちの感覚の中でアメリカへの憎悪が感じられないことについて先生は、戦後の教育とアメリカの占領政策を挙げられました。進駐軍として日本に来たアメリカ人の友好的な態度に、軍国主義の闇の中にいた日本人の心は変化していったのだろうとも教えて下さいました。今回の経験は、今まで私がずっと抱いてきた疑問の解決だけではなく、行動すれば何かを見つけることができるというさらに重要なことを気づかせてくれました。

行動することの大切さを知った私は、改めて原爆のことも知ろうと長崎市の原爆資料館を訪ねました。もちろん、ここでも原爆の悲惨さを感じましたが、強く印象に残ったのは、身体に対する放射線の影響の展示です。放射線は、長く人の身体を蝕み、様々な病気を引き起こします。そしてそれに留まらず、被爆二世、三世へと続いていく、まさに原爆の影響もまだ続いているのです。先日、この原爆について調査をしている大学の関係者にお話を伺う機会がありましたが、そこでも、

「まだ続いているんです。」

という声が聴かれました。

戦争は、７５年も昔のことで私には関係ないと思っていた自分を恥ずかしく思います。戦争を知らない私たちは、まずは行動してみることが大切です。行動すれば、必ず何かを実感できます。原爆資料館の出口に、今年の長崎平和宣言の全文が掲示してあります。その中に“当事者”という言葉がありました。行動し実感することで、私たちも“当事者”となれるのです。今年１０月、国連で採択された核兵器禁止条約の批准国が５０を超え、来年１月発効します。核兵器を持たない国々、つまり“当事者”でない国が核兵器廃絶に向けた行動を起こし、“当事者”となったのです。日本の批准については、また別の機会でお話したいと思います。

皆さん、平和に向けて何か行動してみませんか。戦争体験者が人口の１５％を切った今、私たちがそこで感じたことを“当事者”として伝えていく必要があるのです。そしてその先に、真の平和があるのだと私は信じます。